

レジャー志向性尺度の開発に関する研究（3）

—成人女性サンプルによる尺度安定性の検討と旅行行動への応用—

○佐橋 由美（大阪樟蔭女子大学） 宮崎 幸子（中京女子大学）

Keywords: レジャー診断ツールの開発, 成人女性データによる志向性尺度安定性の検討, 旅行行動予測への応用

【目的】

団塊世代の大量退職の時期を迎えている今日、中高年層の第二の人生とりわけ、レジャーの面での充実に対する社会の関心は、より一層高まってきているように思われる。しかし、レジャー研究の成果は、未だその社会的ニーズに十分応えうるところまで来ておらず、また、中高齢期のサクセスフルエイジング、良好な適応という観点から研究を進める健康心理学等の分野でも、レジャー生活の充実を主題として取り上げる研究はほとんど認められない。このような状況下、当研究者は成人、とりわけ中高齢者のレジャー生活の状況把握とそれがwell-beingに及ぼす影響を、比較的中長期のタイムスパンで研究を進める必要性を実感しつつ、これまで、個人のレジャー生活の実態ならびにレジャーに対する考え方を把握するための鍵となるような中核概念を探索し、定量化することに取り組んでできた。

これまでの成果は、佐橋・多留(2006)、佐橋・佐藤(2007)、Sahashi, Y. & Sato, K. (2007)として発表してきた。大学生という若年層データのみによる検討結果であるという限定はあるものの、①レジャー志向性の概念がほぼ安定した下位概念から構成されること、②この志向性概念がレジャー生活の質的あるいは量的な意味での充実度をかなり正確に予測でき、さらに③生活全般の充実度(well-being)さえも予測できる非常に有効な概念であることを明らかにすることができたと思われる。

一連の調査研究によって、レジャー生活の状況把握を行うための評価ツール開発に一定の成果をあげてきたと考えるが、さらなる課題として、この尺度がより幅広い年齢層の成人に通用する汎用性があるか確認したり、より多様な行動領域への実践的応用の可能性を探る作業が必要になったことが明らかになった。

そこで今回の発表では、有為抽出によるサンプルの偏りの問題や対象を女性に絞ったという限定はあるが、これまでの研究よりは対象となる年齢幅を広げて(20～69歳)調査を実施し、志向性尺度の統計的な分析と、レジャー活動の主要な領域である旅行行動と志向性の関わりについて検討した結果を報告する。

【方法】

対象： 学生を含む成人女性（20歳以上）。

調査手続き： 本調査（『余暇生活に関する調査』）は2007年7～11月にかけて実施された。調査データの収集にあたっては、調査者が直接、あるいは調査者のゼミ指導学生を介して知人に協力を求めるとともに、学生調査分については、調査者が担当する授業時間に実施した。

有効回答： 志向性尺度を中心に、その他いくつかの尺度において回答に不備があったものを除外した結果、分析に用いることができた有効票は20歳代（ほとんどは学生）61件(26.8%)、30歳代43件(18.9%)、40歳代41件(18.0%)、50歳代48件(21.1%)、60歳代35件(15.4%)、総数は228件、平均年齢41.1歳(SD=15.4)であった。

質問紙の構成：

—レジャー生活全般に関する質問—

レジャーに関わる部分の質問内容はまず、研究の主眼である①レジャーに対する考え方や好み、行動傾向等を把握するための32項目のレジャー志向性尺度、そして②レジャースタイルを様々な活動領域における参加頻度から量的に明らかにするためのレジャー行動目録(47活動)、③レジャー場面における各個人の内発的動機づけ傾向を測定するためのレジャー内発的動機づけ尺度(Weissinger & Bandalos, 1995)（4つの下位尺度のうち、

「挑戦」と「関与」の計9項目), ④レジャーにおける阻害要因の認知度を8領域にわたって測定する尺度 [LDB Users Manual (Witt & Ellis, 1988)], ⑤レジャー生活満足度 (単一尺度) 等からなっていた。

レジャー志向性尺度; 32項目からなり, 各設問ともレジャー場面における考え方, 行動傾向を表す内容的に相反する2つの文章「A○○○○…」 「B○○○○…」 が示されている。これらについて, 自分の考えや行動に相当する程度を「A」「どちらかといえばA」「どちらかといえばB」「B」で回答する。

—旅行に関する質問—

レジャー活動の典型的な一領域である旅行に関する質問がもう1つの柱であったが, これについては, ①好みの旅行スタイル (「家族旅行」「リゾート」「都市型遊興」などの16項目にわたる旅行タイプから第1位と第2位を回答), ②旅行する際に重視する条件 (「人間関係を深める」「のんびりリラックスする」「見聞を広め知識を豊かにする」など17項目にわたる重視項目に対し, 「非常に重視する(5)」～「重視しない(1)」の5段階評定), ③過去の旅行経験 (これまでの海外旅行の回数と昨年の国内旅行回数) 等について質問した。

—全般的 well-being に関する質問—

①全般的well-beingを測定するためのPILテスト(Purpose in Life Test Part-A), ②充実感尺度(大野, 1984), ③生活の様々な領域における満足度を測定するためのQOL尺度等が, 主たるwell-being調査項目であった。

【結果と考察】

1. レジャー志向性尺度の構造

志向性尺度の構造を確認するために主因子法による因子分析を試みた(表1)。固有値の減衰状況, 解釈のしやすさ, 過去の分析結果を考慮して6因子解を採用。因子抽出の後, プロマックス回転を実行した。表1によると, 抽出の順序が若干異なっているものの, 先の研究で確認された6因子とほぼ同一内容の6因子が抽出された。佐橋・佐藤(2007)では, I. 長期的展望・向上→II. 活動性→III. 対人関係志向→IV. 主導性→V. 利他主義→VI. 自然志向の順に6因子が抽出されたが, 本分析では, 「III. 主導性」「IV. 対人関係志向」の抽出順序だけが逆転していたものの, 他の順番に変わりはない。当該因子への因子負荷量が0.35以上という基準により, 基準を満たしていない攪乱項目を探していくと, 厳密には3項目あったが, そのうちの2項目については十分許容できる範囲であると考えられた。唯一 No. 26「A. 外出好きで面白いことを外に出て探している」の項目だけが, 「活動性」因子に属すると考えていたところ, 「対人関係志向」因子により多く負荷するという結果であった。従って, 今回の結果からも, レジャー志向性を構成する要素は安定したものであることが確認された。これまでの調査は, 大学生という若年層成人に対してのものであったが, 対象年齢を60歳代まで広げても, ある程度まではこの尺度の安定性を確かめることができた。ただし, 年齢構成において20代の数が多いところは注意しなければならない点である。因子ごとの信頼性係数は, $\alpha = .839 \sim .706$ であり, 各下位尺度の内的一貫性は十分に高いと考えられる。

2. 志向性尺度を用いたレジャー生活の診断とwell-beingへの影響の検討

ここでは, 志向性尺度の得点に基づいてクラスター分析を行うことによって, サンプル全体をレジャー志向性に関して何らかの特徴を示すいくつかのグループに分類することを試みる。さらに, そのセグメンテーショングループごとに, 様々な活動への参加頻度, レジャーに対する内発的動機づけ, レジャー場面における阻害要因認知などのレジャー関連変数ならびに全般的なwell-beingレベルの比較を試みる。レジャー関連変数やwell-being変数に関して, グループ間で何らかの差異が一貫した特徴的パターンで示されるのであれば, 志向性尺度が各個人のレジャー生活を診断するツールとして, ある程度有効であるということが示されるものと思われる。

図1は, 因子得点を用いて階層クラスター分析を行った結果を示したものである。今回は, 全サンプルを5グループに分割して, 各グループの志向性に関するプロフィールを作成した。各グループの特徴を端的に言い表すラベルを探すとすると, clu1→「消極型」, clu2→「自己啓発型」, clu3→「高活動-対人関係志向型」, clu4→「低活動-対人関係依存型」, clu5→「最適型」などを充てることが可能かもしれない。プロフィールと対応させて見

表1 レジャー志向性尺度の基本統計量および因子分析の結果

No.	質問内容(+)	平均	SD	第I因子	第II因子	第III因子	第IV因子	第V因子	第VI因子	クロンバ ツク α
				長期的 展望・向上	活動性	主導性	対人関係 志向	利他主義	自然志向	
* 13	A 将来の目標に向かって自分を向上させたい	2.29	1.00	.786	-.122	-.060	.008	-.029	-.081	.839
* 21	A 今知識や技能がなくても努力すればできるようになると思う	2.31	0.83	.738	-.142	.048	.142	.122	-.053	
29	B 将来の自分にとって糧になる活動を趣味として行う	2.31	0.78	.728	-.142	-.025	.107	.033	.016	
* 30	A 趣味であっても極めるためにはいかなる努力も惜しまない	2.22	0.89	.628	.177	.083	-.076	-.126	-.054	
* 14	A 資格取得や技能向上を意識しながら趣味活動をする	2.13	0.92	.564	-.006	.097	.062	.076	.082	
5	B 時間ができれば何か学びたい	2.27	0.99	.408	.138	-.145	-.211	-.013	.005	
22	B 新しく何かを学ぶことが好き	2.62	0.84	.344	.402	-.147	-.020	-.046	.251	
6	B 挑戦的で奥深い活動が好き	2.00	0.89	.344	.136	.129	-.272	-.006	-.116	
* 25	A 体を動かす方がエネルギー充電になる	2.32	0.93	-.021	-.059	-.033	.002	-.020	-.020	
* 1	A 体を動かしたい	2.56	0.89	-.107	-.019	.196	-.060	-.042	-.042	
* 18	A ドライブや旅行に積極的に出かける	2.84	0.84	-.118	.180	.154	-.044	-.083	-.083	
* 17	A スポーツやフィットネスなどをして体を動かす	2.16	0.88	.120	.022	.092	.083	-.008	-.008	
2	B 出かけた	2.66	0.88	-.088	-.074	.213	-.083	.034	.034	
* 10	A 映画やコンサートを見に行く	2.58	0.94	-.120	.131	.128	.082	-.152	-.152	
9	B 作業や手仕事をしてこまめに動く	2.39	0.94	.153	.347	.089	-.052	.032	.015	
* 26	A 外出好きで面白いことを外に出て探している	2.32	0.78	.034	.195	.112	.344	.012	-.181	
* 23	A 最初に何かの提案をするのは自分だ	2.29	0.95	-.037	.010	.804	.008	-.014	.069	
31	B 何かを計画する時自分が中心となって進める方だ	2.27	0.82	.019	-.029	.791	-.050	.007	-.012	
* 15	A 自分が中心となって計画を立てるのは楽しい	2.47	0.90	-.005	.114	.729	-.092	-.021	.126	
* 7	A 人が集まる場面では輪の中心	2.17	0.79	.102	-.090	.354	.235	.087	-.066	
* 12	A 誰かと一緒に過ごす	2.64	0.90	-.035	.023	-.014	.762	.092	.088	
20	B 友達や家族とおしゃべりする	2.58	0.93	.146	.120	.045	.612	-.260	.006	
4	B 友達と過ごしたい	2.76	0.92	-.049	.245	-.105	.598	.067	.066	
* 28	A 私の趣味活動は人と一緒にするものが多い	2.54	0.89	-.137	.337	-.054	.357	.069	-.009	
* 24	A 自由時間には、できるかぎり社会や人の役に立ちたい	2.12	0.83	.139	-.138	-.017	.127	.803	.047	
* 8	A 人の役に立つことは喜びなので自由時間にはそのような活動を行う	2.05	0.80	-.065	-.056	.017	.021	.728	-.112	
16	B ボランティアやNPOの活動など、時間があつたらしてみたい	2.49	0.95	-.066	.309	.005	-.176	.519	.141	
32	B 積極的にボランティアや社会貢献活動に関わっていききたい	2.14	0.67	.069	.172	.004	-.115	.496	-.042	
* 27	A 人のいない静かな場所に行きたい	2.96	0.77	.090	-.201	.089	.087	-.047	.747	
* 3	A 旅行するなら自然豊かなところ	3.39	0.79	-.048	-.020	.000	.047	.041	.684	
* 11	A 自然の中にいると落ち着く	3.43	0.66	-.148	.006	.060	-.032	-.079	.675	
19	B 自然の中でのスローライフにあこがれる	2.87	0.81	.036	.208	.008	.014	.063	.349	

説明率	54.2%	因子相関行列					
		I	II	III	IV	V	VI
I	—	.417	.291	-.187	.416	.110	
II	—	.384	.142	.431	.090	.845	
III	—	.136	.202	-.103	-.103	-.103	
IV	—	-.106	-.291	-.133	-.133	-.133	
V	—	—	—	—	—	—	
VI	—	—	—	—	—	—	

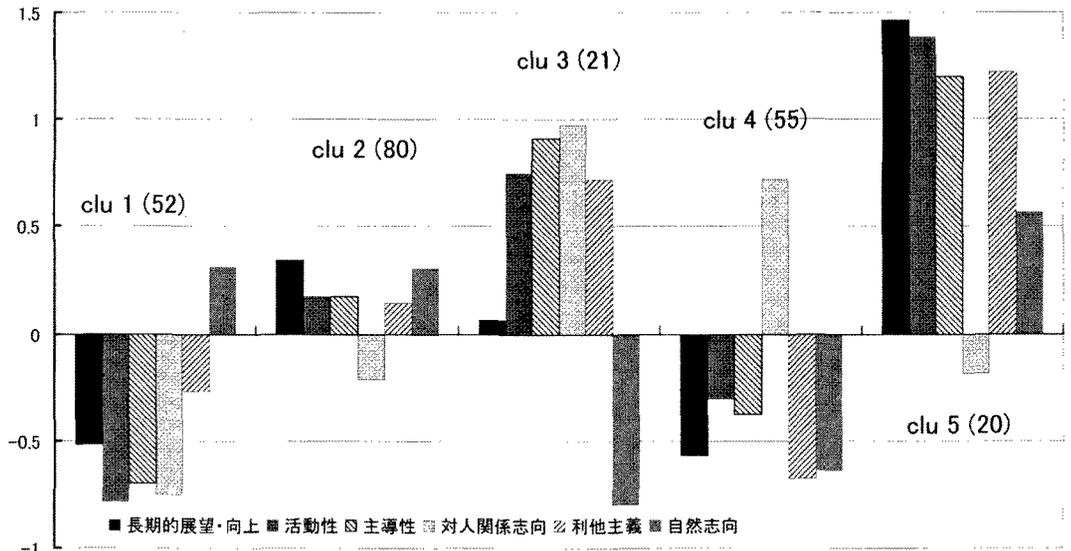


図1 各クラスターにおけるレジャー志向性の得点パターン(プロフィール)

ていくと、「自己啓発型」とは自分の将来を見据えて行動する人で、向上心が強いところが特徴である一方、人とのつきあいが苦手な人ともいえる。「高活動-対人関係志向型」と「低活動-対人関係依存型」は対比させてみると捉えやすい。前者は、活動的で、主導性もあり、他者に対する配慮も怠りがない。その上で、一人よりは人と一緒にいることを好む性格であるが、後者は、単独での自立した行動がとれないというマイナス面が顕著である。活動性も低く、基本的にリーダーではなく追随者である。他者への気遣いも充分な方ではない。そして、多くの観点から判断してネガティブエンドにあるのが「消極型」で、他方、ポジティブエンドに位置するのが「最適型」という図式を思い描けそうであった。表2は、それら5グループのレジャー生活の状況、生活全般の質を比較し、

表2 レジャー関連変数及びwell-beingのグループ間比較の概略

比較項目	低活動-対人関係依存型		自己啓発型		高活動-対人関係志向型	最適型
	消極型	対人関係依存型	対人関係依存型	自己啓発型	対人関係志向型	
	clu 1	clu 4	clu 2	clu 3	clu 5	
レジャースタイル						
運動・スポーツ	▲	▲	△	○	◎	
外出	△	○	△	◎	○	
社交	△	○	△	◎	○	
見物・観賞・映画	△	△	○	○	◎	
演奏・パフォーマンス	▲	▲	△	△	○	
教養・学習	△	▲	○	△	◎	
アウトドア	△	△	△	△	◎	
社会的活動	▲	▲	○	○	○	
活動領域全体	▲	△	△	○	◎	
レジャー生活満足度	○	△	△	◎	◎	
内発的動機づけ	▲	▲	△	○	◎	
阻害要因認知(少)	△	▲	△	○	◎	
生活充実感	▲	△	○	○	◎	
QOL	▲	△	△	○	◎	
生きがい感	▲	▲	○	○	◎	

◎高レベル ○中レベル △低レベル ▲著しく低いレベル

図式的に表現したものである。表2より、とりわけ「最適型」と「消極型」の間には、レジャー生活の様々な側面、ならびに生活全般の質的側面において顕著な差異が存在しており、レジャー志向性には、レジャー生活の量と質、生活全般の質に関して、個々のサンプルを順序づけ、マッピングする機能があることが示された。

3. 旅行行動への応用

志向性のプロフィールは、各人の旅行行動や旅行に対する意識（旅行に求めるもの）の特徴を描写するのにある程度、効力を発揮していた。例えば、旅行にどのような要素を求めるのかという問いを行ったところ、「鮮烈体験」「視野拡大」「人間関係」「快適生活」「リラックス・癒し」というまとまり（因子）が確認され、その中で初めての3要素については、分散分析の結果が有意であった。多重比較を行った結果では、「最適型」が他の4つの志向性タイプを引き離しているというものであったが、それでも、「鮮烈体験」「視野拡大」「人間関係」因子では、表2に示したような「消極型」「低活動-対人関係依存型」<「自己啓発型」

「高活動・対人関係志向型」<「最適型」のだいたいの順序性は維持されているようであった。旅行回数による行動の活発さについては、「最適型」

「高活動-対人関係志向型」とその他3グループの間に有意差が認められ、図に示すような一貫した順序性が保たれていることがわかった。その他、好みの旅行スタイルについての分析結果でも、志向性と好みとする旅行スタイルの間には有意な関連性があることが確かめられ($\chi^2=117.82$, $df=60$, $p<.001$)、「消極型」「低活動-対人関係依存型」で「リゾート滞在」や「癒し」目的の旅の選好度が高く、「最適型」「高活動-対人関係志向型」に、「入念な計画に基づく冒険旅」「アウトドア活動」等の選好傾向が顕著であった。

【文献】

Sahashi, Y. & Sato, K. (2007) The development of the Leisure Orientation Scale. *Asia-Pacific Conference on Exercise and Sports Science 2007 Program and Abstracts*, 117-118.
 佐橋由美・佐藤馨(2007) レジャー志向性尺度の開発に関する研究(2) 日本レジャー・レクリエーション学会第37回大会発表論文集(レジャー・レクリエーション研究, 59), 52-55.
 佐橋由美・多留里香(2006) レジャー志向性尺度の開発に関する研究 日本レジャー・レクリエーション学会第36回大会発表論文集(レジャー・レクリエーション研究, 57), 106.

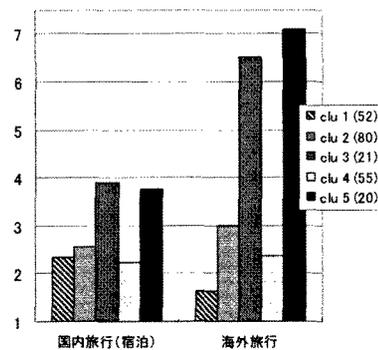


図2 旅行回数のグループ間比較